後拾遺和謌集　上

特別
イ4
3163
9(1)

後拾遺和謌集序

我君あめのしたしろしめしてよわこれそとより
四海波のこゑきこえてここのつの国みつきたえす
世継の事あと古よき道をつたへよるによつの
ことわさを知らるなる花の春月の秋おりにつけ
こゝろにのこそてもあはしくまてかたく頼んおります
ちゝにかゝりてちりくさふかくひとつくく人の月に
わさ
きり風にわさそる事ありて花をとそてわすれ
鳥をわたり継まゐすゝめる頃につかはし御ありし
我あまわれにしきなりけれやまれうしあつゐさ世継事

わかま拾遺集にいろさ数あぬちのおり於え
そのほか草かすあつむつとらしれんありけるおほ
きおけゝ海を継ゝ見れゝわさゝにみちとわかと
うあらゐをわり中まての一事海をたゝけ
しれおほせ心にかゝりて於をもあらむとなる
るまされゝりのゝ春に於りにそれいあゝ應し
此らゝ従のゝし哀れなるほ此日あまれのゝ也
わりやそれなさにそあれりていつれいとさを
ゆまゝけるゝそのゝれおほせ於ひそれわりに
思ひ継てちりくなるうのえのいはつあゝゆゑ

のこれりけるをきゝては古今後撰拾遺集に
はちかく見とりものゝ次第なれはのちの秋の世
のなかきにおもくはつれ母のさうしおほろけならぬ
後よりこれはさいまなゆ数まてのたまひたりけるに
なりとそあるをかつましもあり天暦の末よりゆかしに
いろはまて世の中とかはあまりひとつはかりのとせ
あまりよみおかれたるを梨壺にてえらはれし松ひさしく
つゝたまれなりしもすまてた海のかたになかれ出しを
まて家くれこのたかく月くつもりにけりと紙
えた梅みちのまてれ年しこえはしましさとてもさまに

かきれなところをは山かくれいるまよこゆくてはるかに
ことならしすゝき秋の月れからかねてこそ見えけれ
花のにほひある梅えちらしかさゝきちりこそあまり
やはらたけたるさまをはとゝのへるまて撰
遺和謌集はいにしへより古今後撰なとの
集にちかりなりしを家の集をはらならあれ
里人もえらひしこそなきにあらしとさへ
はかりいにしへのうたかひにのうへはりむかし
津の国のいつれひとつをへりつゝみなりしけれ
ありいにしへ大中臣能宣清原元輔源順紀時

文坂上望城等これなりちはやふる神代をこえて
くれ竹のよゝにたえす水のひさしく絶ぬ事なり
これら此人のこゝろはちさからていまのよにしれる
むかしのことをかへすにいゝ数年てわか心にかなはゝ
いまゝ数よるに河のみちを代尽しとしみちと
といやしとするこのわさよりてちはやふるなかて
その代をむつとかくなん河の万葉集ハあまたとのち
なん此よのよしの川なしとみゆはからすん人にあふを
此いさゝハいはゝよに二乃集をえらひこの事
名よに有とももれにけにわれならはみとハ万葉集

此奏をえらひてつねのことくわかひをなしかり
かの集乃ことはゝやまと歌事代かつくかくまとの
河らた勅りせられてなつこれいまのよにかなはて
まかくらをしれおほし延喜の御代よりみかとハ万葉
集のゆりのつきに此奏をえらひくよによりてこまへ下
いく将てゐまの古今和歌集これなりむかしをしれ
平の勅御よりハまさに古今和歌集なりいつくさ勅
こさんに奏をえらひてそ後撰集となつけまさ
花山乃法皇ハ此類のよき代の集をいつくさ勅に代
とわひける拾遺集となつけ給ふとかやその

集をこしらへねとも此ことくしてこそあれ　そかりし
かゝりし二乃御大納言公任卿みなもちあまりものゝさ
人をねまいらせて進かれ之なり後をちあまり
いさゝかも代々繁いらしまさとを以まうけいのゝさ
撰わたせてよみつくる勅志のそにおほやまとうた
うれをきうち紀氏かよくまつ紀元そ躬恒忠岑にも
よみつくめの御時はちかうしむかしあまのうた乃八雲
うたはえてひろく人にちとし我ゝ心ゆゝまつるゝとひとよ
ましるを以はらで或はまかに凡集といふいふ海
とれ身に人にたまへすくれあるなるに巫之精りうたとかゝき

いうてこゝろねの玉乃集と成ん事つけうたさかしく
なもわうれくうきにおさけおもし　折にふれて
二乃むくさ此集は年しも紀をいやし紀を志候ひ
しるしうを今月くしきおけ人稀のへ年やうなるから
此世すといふ事なし能因法師とゆふとこ此あまり
心花乃山のわと候ねひてはとれ人ゆゑてまう
わっよ子河むとしわひさゝ人のうち候えて袖て　きと
集となうけ毎りこれを此集年いりしうちは
お海のてかみんらうなし抄形して候ねまいり花
母をかしき稀ん二乃集よ此せうてし随し天つうつりし哉

花乃集にはいひあはしひかれ山かしかしましさかしきなる
家からん米のゆかりの序集といひあつめて言乃葉いやし
きよき旅ごころみに露をわすれて雑なるひとは連
かしましきにもしたてゆかれぬこころよつらひ
ならはれたとへん山川乃おもかげ見えてみなもと
格をしらぬうちのこころ濤越乃ことみえていでまれ
かへらにもしてゆかしとしきまことには雑らの集に
乃せてかへらばかはらぬにも行を次つらねかへ小さき
ころね武とり石のあかりけさをたまれよしとれつてとを
あまたゆゑとなり出家らはところくの趣あり

こ乃ころ日見んつらられ情ともおもひ云乃くもくひく
の御目世にも世に見えかはしくなる果りの世にまれなる
果りなからむく乃せてる事ありこの集をとて
風つれなかりしもとなんあり寒おもふこそこの外
の新見くまれつらのた海辺よ越かきまて志ら
おもんみれ折まくとも越乃たねを越かきよつせろ言
このよれ歌くあまたにもとをれ本れくまたく見るとと
果こいまの元らそらんハ云雑りしにたん行ち男ハ
かくれぬまとを名乗らをあをしれおまゑハいまをも海
もおほけれ心にも代格く正忘日をはくこ人かす

とありしてえうへかはしきりに次ハきえなりてか
ららと風のまへにちりてそ散うりあるたまれ言え
も露そへり小萩しらせぬんきと見よりてきう
のみれ分つ秋の来清くなれのつくくときうは
れさりひみされ清く見えとせ見ぬり也我ハ称分き
見えの此し乃を見れわきいさよひの夜わひえつ
ひをとえりめつことみぬんはりきうかなといへり

後拾遺和歌集第一

春上

正月一日よみ侍りける

小大君

いかにねておくるあしたにいふことぞ昨日をこぞとけふをことしと

ゐなかに侍りける年春立日によみ侍りける

光朝法師母

いそぎみよし野は霞も立ぬらん雪はあしたにわくとこそきけ

春は東よりきたるといふことをよみ侍りける

源師賢朝臣

東路はなこその関もあるものをいかでか春のこえてきつらん

春立日よみ侍りける

橘俊綱朝臣

あふ坂の関にや春もこえつらん音羽の山のけさはかすめる

寛和二年花山院歌合によみ侍りける

大中臣能宣朝臣

春のくる道のしるべはみよし野の山にたなびく霞成けり

正月ついたちころ小山寺に侍りけるに人のとひ侍らざりければ

人しれず入りぬと思ひしかひもなく年も山ぢをこゆるなりけり

山寺に正月に雪のふりけるによめる

平兼盛

ふりつみてイ
雪ふりて道ふみまよふ山里にいかにしてかは春のきつらん

題しらす

加賀左衛門

わきてしも春はくれとも見ぬ人と梅のちりくるねにほふらん

天暦三年太政大臣の七十賀し侍ける

屏風によめる

大中臣能宣朝臣

こほりせし淀のあしのしたねとけ汀もえむる春は来にけり

一条院の御時殿上人春のうたとてこひ侍けれは

[illegible]よめる

紫式部

み吉野は春のけしきにかすめともむすほれたる雪の下草

花山院乃歌合にかすみをよみ侍ける

藤原長能

吉川の水をハいまそ春来ぬと谷の霞ハ峯にたなひく

題しらす

藤原隆経朝臣

春とは小野への春の梢乃てねハ梢も霞や立そひ

和泉式部

春霞たつやをそきと山川の岩間をくゝる音きこゆなり

寛和三年七十賀の月次の屏風の時に客

のきちかきところによめる

赤染衛門

むらさきの袖をかさねてきたるかな春たつことはこれそうれしき

春の時客によめる

小弁

むれてくる大宮人は春をへてかはらぬなからめつらしきかな

入道前太政大臣大饗し侍りける屏風に

時客のかたかきたる所によめる

藤原輔尹朝臣

むらさきもあけもみとりもうれしきは春のはしめにきたるなりけり

おなし屏風に大饗のかたかきたるところによ
み侍りける

入道前太政大臣

春日野にやまつる使になりし野のまつにかはらぬやそらん

民部卿泰憲近江守に侍りける時三井寺
にて歌合し侍りけるによめる

よみ人しらす

春たつとかねて宮この鶯はねよりやとりていそきいてたん

うちきゝ侍ける

大中臣能宣朝臣

山ふかみまたきえやらぬ雪なりと鶯の出てぬるねはかはらすそなく

正月二日あふさかにて鶯のこゑをききて
よみ侍りける　源兼澄

ふるさとへ行人あらはことつてむけふ鶯のはつねきゝつと

選子内親王いつきにおはしましける時正月三日
女房あまたまゐりて梅かえといふうたを
うたひけるをきゝて内よりけいし侍りける

よみ侍りける　よみ人しらす

ありつゝも雪まにかすむ山里に春はきにけり鶯のこゑ

かくいひやり侍りけるかへりことに
きゝてよみ侍りける

清原元輔

鶯のなくねはかりそきこえける春のいたらぬ人のやとにも

俊綱朝臣の家にて春山里に人をたつぬ
といふ心をよみ侍りける　藤原範永朝臣

たつねつる宿は霞にうつもれて谷の鶯一声そする

小野宮太政大臣の家に子日し侍りけるに
よみ侍りける　清原元輔

千年へんやとの子日の松をこそ外のためしにひかむとすらめ

題しらす　和泉式部

ひきつれてけふは子日の松にまたいまちとせをそ野辺にいてつる

正月子日庭におりて松ひきてあそひに
ひとゝ侍りし日よみ侍りける

よみ人しらす

春乃野に出ぬ子日は老人の心をかりしと松ひきまし

正月子日にわかりて侍りけるに良暹法師の
もとへつかはしける子日をいつれさすらひ
小松ひく侍りけるにまことは何そ日けれ
にも来てよみて侍りし　良暹

賀茂成助

とひきて君かかの野に子日しく人のまつとこそなれ

今上六条におりゐ給て上達部ちへのとのに
ともなひとかり侍よりわたりて子日し侍りける
によみ侍りける

右大臣北方

紬かけてひきそやるまゝ在小松原いまもとも君かれ　行末た

三条院御時に上達部殿上人ありて子日せんと
し侍りけるに秋院の女房ちかきことにこれはとん
とりけるとおもひまかるにそれはこれまつさて秋
院にてもよまり侍りける

堀河右大臣

ことしより子日の松とひかるへしいかにねたかりしまひさゝ

題しらす　民部卿経信

あさみとり野への霞はあさかりけに子の日の小松をまかせつるかな

嘉暦二年内裏哥合によみ侍ける

左近中将公實

君か代にひきくらふれは子日する松のちとせも数ならぬかな

正月七日子日にあたりて雪のふりけるによみ侍ける

[illegible]

伊勢大輔

人はみな野への小松にひかれゆくけふのわかなは雪やつむらん

正月七日卯日にあたりて侍けるに字（?）

うつゑあまたやおこせし通宗朝臣のもとよりひとつおこせて侍けれはよめる

うつゑつくつまのはたまさくに君か子の日の松にあなるなり

たいしらす

大中臣能宣朝臣

白雪はまたふる里のかすか野にいさうちはらひわかな摘てん

和泉式部

春日野は雪のみつむと見しかともおひ出る物は若菜なりけり

後冷泉院御時后の宮哥合によみ侍ける

中原頼成妻

摘ためる人なき雅にもあかりけり我ためのわかなつまなん

正月七日きさいの宮の内侍のもとにつかはし
ける　藤三位
かはらすもをかしき[illegible]鶯[illegible]なりけるかな

長楽寺にてふるさとの霞の心をよみ侍ける　大江正言
山たかみ都の春をみわたせはたゝひとむらの霞なりけり

能因法師
余所にては霞たなひくふるさとの都の春はみえやしぬらん

題不知　選子内親王
春はまつ霞に[illegible]山里はかゝりてこそは人のおとなき

[illegible]網代[illegible]てよみ侍
ける　藤原節信
けふ[illegible]の[illegible]にたちそひて[illegible]かすみわたれり

曾禰好忠
三しまえにつのくみわたるあしのねのひとよのほとに春めきにけり

正月はかりに津の国に侍けるころ人のもとにいひつかはしける　能因法師
心あらん人にみせはや津の国のなにはわたりの春のけしきを

よみ人しらす

難波かたうら吹風に浪たてはつのくむ芦のみえみ（みえすみ）

春乃二月歌よめる

権僧正静円

わかのゝすゝきに萌出のくさハ名こそありけれ駒さへそなつく（かのまけイ）

長久二年弘徽殿女御家歌合に春（えゆ）
駒をよめる

源兼長

立はなれ沢辺に行て春駒ハおのかかけや友となるらん（こゝろん）

屏風の絵に春しおほくむまこ在て旅人の
桃の花のもとにゐたるをよめる

藤原長能

かりかねハかへりてをみましかゝるそらの花をちらしにきて吹かせ（かり）

たいしらす

和泉式部

秋まてハ命もしらす春の野に萩のふるえをやくとやくときて（ねイ）

後冷泉院御時后宮の歌合に残雪を
よめる

藤原範永朝臣

花ならて折らまほしきハ難波江の芦のわかはにふれる白雪

屏風の絵に梅花ある家にまらうときたる
所よめる

平兼盛

梅か香をたよりの風や吹つらん春めつらしく君かきませる

わかこゝ梅のさかりに人のきたるによめる

大中臣能宣朝臣

梅花にほふあたりの夕暮はあやなく人にあやまたれ
まされけり

春の夜のやみはあやなしといふ事をよみ侍り
ける

前大納言公任

春の夜のやみにしあれはにほひくる梅より外の花なかり
けり

題しらす

大江嘉言

むめか香を夜半のあらしの吹ためてまきの板戸のあくる
待けり

村上御時清涼殿のこうはいを女蔵人ともによ
ませ給ひけるにかはりてよめる

清原元輔

梅の花かはことことに匂はねとうすくこくこそ色は咲
きけれ

山里にすみ侍りけるころ梅花をよめる

よみ人しらす

我やとの垣ねのむめのうつり香に独寝もせぬ心ちこそ
すれ

題しらす

前大納言公任

わかやとの梅のさかりにくる人はおとろくはかり袖そ
匂へる

和泉式部

春はたゝ我宿にのみ梅さかはかれにし人もみにと
きなまし

山家梅花といふ事をよめる

賀茂成助

梅花垣ねにほふ山里ハ行かふ人の心をそみる

春風夜芳といふ心をよめる

藤原顕綱朝臣

むめ花かをりにほはす春の夜のやみハ風こそうれしかりけれ

梅花を折てよみ侍ける

素意法師

梅の香(え)を折まてつゝれる衣手に思ひもかけぬうつりかそする

大宮右大臣家東三条にて右よりて世継ひ

にしの家の紅梅をうつしうへられて花のさかりに

しのゝめにかりていとおもしろく侍けるを

えてまもなくつまの家にて侍ける

雑乳母

かはかりのにほひなりとも梅花しつの垣根を思ひわするな

たいしらす　　大江嘉言

ちるやかねて人ねかりそ梅花あらしなりともとふらん

清基法師

風ふけハをちの垣根の梅花香ハ我宿のものにそありける

道雅三位の八条の家の障子に人の家に

むめの木あるところに水なかれて客人きたる

旅の心よみ侍る

藤原經衡

こゝろなき人にをしへん梅の花ちりても水にながれざらなん

水邊梅花といふことを

平經章朝臣

ちるもなほあかぬのでさゝや白かはの梅のしづえ水のながれは

長樂寺にすみ侍りけるころ二月ばかりに人のもとにいひつかはしける

上東門院中將

柳さへ乱れあふなる露にこそ山里に花待かねの春のくれ

題しらず

小辨

かねて見し秋よりまさる小山田に又打よするまてきたり

雁をきゝて

赤染衛門

かへるかり雲井はるかに成ぬなり又こん秋もとほしと思ふに

藤原道信朝臣

もろこしも夢にみしかば近かりき思はぬ中ぞはるけかりける

馬内侍

わすれねん君見えん梅の花のにほひ人にかたる那

津守國基

うすずみにかくたまづさとみゆるかなかすめる空にかへるかりがね

雜

乳母

折しもあれいかに契りてかりかねの花の盛りにかへりそめけん

屏風に二月山田うつところかきたるを

あら小田によき返しつゝ行者歟

大中臣能宣朝臣

春りかへ今日こそみなくちの小山田にせきかくる水のひまもとゝなん

天徳四年内裏歌合にやなきをよめる

坂上望城

あさみとり乱れてなひく青柳の色にそ春の風もみえける

原形 枝以 水をかへる心よわる

菅原輔昭

池水のみくさもとらて青柳のはらふしつえにまかせてそみる

題しらす

菅原元真

わきてなをみとりくふかき青柳の色まさる春の風もみえける

二月ばかり良暹法師のもとにおくりやとよせ

はるまてと待たれぬ人くくして花見ぬ春なんそぬ

わか身まて春のいさなふとおもひて

歌そへていひしけり

藤原孝善

春霞たつ山の林まてはらひもなはれゆくらん

人々花見にまかりけるにともにとつ来侍る
侍りけれはつかはしける　藤原隆経朝臣

山さくら見にゆく道をへたつれは人の心そ霞なりける

二月のころほひ花見に後總相法し伏見
の家にまかりてまかりけるにまかりて
てはしめてよみ侍りける

皇后宮美作

うらやましいつ身ともかな桜さく伏見の里の花のあるしと

花見にまかりけるに嵯峨野にやけみると
よみ侍りける

賀茂成助

小萩さく秋まてあらはおもひいてむ嵯峨野をやきし春はその日と

題しらす　永源法師

さくら花さかはちりなんと思ふよりかねても風のいとはしきかな

中原致時

むかしのゝ桜は花にかくされて柳のえたにちらせそふける

橘元任

昨日まてよそにおもひし山さくらこれもかりそめ人にまかせて

一条院御時殿上人々花見にまかりて女
のりくるまにつかはしける

源雅通朝臣

折ゝに折りてハいつか山さくら今年さく花にまさらん

平　盛少將

をしみてかへりにける山桜風にちらさて折りし花かと

後冷泉院の時うへのをのことも花見にま
かりてかへりてことゝよみてまゐらすへきよし仰られけれ
はよみてまゐりて侍ける

一宮駿河

思ひやる心ハかりハさくら花たつぬる人にをくれやハする

今上乃御時殿上の人ゝ花見にまかりける

后の中宮女房のかたにさくらのさかりに人ゝまゐりてつ
かりしける

右大臣小弁

あくかるゝ心ハかりハ山さくらたつぬる人にそひてゆくらむ

障子絵に花おほかる山里に女あるところ
よみ侍ける

源兼隆

とはれんもちりにし人のをしみしは花の盛とさくらなりけり

たいしらす

藤原輔親

いつまてかさきて折らまし山桜心つくるねたさなれは

菅原為言

折ことのおもてはかりける花に心のあかねかなしき

ゆきはよ花をちらぬとふかんぞよみける

小辨

山桜咲ぬるまにてくもゐ道の月とみゆらん

長楽寺に侍りける時院の山にて桜は

いつかありけるにかよみ侍りける

上東門院中将

にほふらん花のさかりはゆきておりに逢ひける山桜

白川院にて人〻花歌よみ侍りける

民部卿長家

東路の人にとはゞや白川の関にもかくや花はにほふと

見南殿桜

高岳頼言

君がためにはなの名そみえて心は雲井はなれ

うへのをのこどもゝよみ侍りけるに春心花

にほふとも事代ゝみ侍りける

大貳實政

春毎に君が心は桜花あかぬ色とて雲のうへの宿

花を移してよみける

大中臣能宣朝臣

ちりて花も白雪大かたは春のゆくへも

河原院にて人〻山ざくらをよみける

平兼盛

なと思ひけんみなと桜花心とやつて年をへぬへりね
我思桜也けれ〳〵よめる

能因法師

さくら咲春はからなる人あらしにも見えぬ花をは
行て人をともてなりなり行春まれは
よ能ゝ

よみ人しらす

うへとまし人のきたる宿の桜花なをむかひりてもかへらむ
ものおもひ雨にまちてかつ見つゝに山のさくら
ととえやうとくよめる

いろしまな

あらし人はかとこそ見せるをかんかの山にちる秋も
さいかへらす

人まつ見ね宿にしなさくらのへはおもとてやりきかと
われやとれちるらんひもおかりなりありしつとふくしみまれ

道命法師

花見にと人は山に入そ春はあきちる花りけり

紫式部

世中をなけきまし山さくら花ちるらむと人をまつをは
かけしよ事行ころ花をみてよめる

藤原公経朝臣

花ならてさ見れは我事も尽すまし春は浪の花あわれは
堀河右大臣の九条家にて毎山春ありと
いふ心をよみ侍ける

前中納言資基

見るやと思へ櫻たちよりてみし浦とよせ来る浪に春来て
海ならし哉

藤原元真

かりひとの花こそみえつゝ桜花春をはなちてかりける
天暦二年内裏歌合によめる

右大辨通俊

春雨のふりそむる櫻こ見てしかさそふや風のたよりにそきたる

屏風繪人の花見るかたをよめる

平兼盛

花見つゝ家路にたえくゆかんとやいとひかたらん

屏風に三月花の宴したるところ

よみ人

一とせに二たひもこぬ春なれはいとなくちる花とこそ見れ

冷泉院東宮にて侍りける時殿上のをのことも
花見んとて雲林院にまかりけるによ
みくちはうし侍る

ゝゝ山し春はた人か今むまてたのむこれや花さかりらん

良暹法師

通宗朝臣能登守に侍りける時国にて
哥合し侍りけるによめる

源縁法師

山さくら白雲にのみまかへはや春の心のそらになるらん

宇治前太政大臣花見になんと聞てつかはしける

民部卿長信

いかにせん花見にのみ心さへ春をはをしと思ひける
清しらしもなかはしおれれにありける海をきよりけ

侍れとし三月にうるふ月ありけるに
春そてちるなんうらもちりてきおりなは
といひおこせて侍りけるによめる

中納言定頼

桜花さかりにみれは梅のさちれむかしの月とさそはれける

遠花離家といふ心をよめる

坂上定成

余所にみし桜よ山の白雲にかはるわか宿は花とのみこそ
よしあらはとんかとはらふ人の来なきよめる

源縁法師

春ことに君まちとるをわかぬ山桜やゝ花の咲かさらん

高陽院の花さかりに忍ひて東西の山
の花見にまかりて侍りけるに宇治前太政大臣
きゝつけてこれはいかゝよみたるとゝひにおこせて
なやことん頭て侍りけれは久しく田舎に
侍りくちやうに許かゝるよしを申侍りける返事に[?]
かんしかゝとてよみ侍りける

能因法師

世中を思ひ捨てし身なれとも心よわしと花にみえける
花見侍りて太政大臣いと哀なりてなと侍りける

けふをとして侍りける所にひとつもまたさりけれは
みまさかの守に侍りけるにくたりけるに太まうちきみの
う川家物かたりのことを越おもひいてゝ範永朝臣
のりとふ法たりける

世々みとを我よとされや桜花昔のたりとふちらてそなし
たゝれの宮の女房花見侍りし白川に
まかりけるによめる

伊賀少将

かの事とも春の物かたりみに思ひきゝし白河の花さかり
ちりれ大まうちきみの家にて人々よけるよしを

哥よみ侍りけるに遥に山桜をのそ
むといふ心をよめる

大江匡房朝臣

たかさこの尾の上の桜咲にけりとやまのかすみたゝすもあらなん

遠山桜といふ心をよめる

藤原清家

吉野山八重たつ峯の白雲にかさねて見ゆる花さくらかな

ちんまうにまかりたりけるに家の花
をしむ人々よ見侍るにもよめる

藤原通宗朝臣

桜りひとつくともかひやまし遅桜ちりて花のさかりなるらん

花のちりやまに帰らん事をしらすといふ心をよめる

良暹法師

とふ人も宿にはあらし山桜ちりてそかへりし春しかれハ

基長中納言東山に花見侍りけるに布こ
ろもきたる小わらはしてゆれともきせて
こらせ侍りける

加賀左衛門

ちるまてハ旅ねをせなん木のもとにかへらハ花のうらみもそせむ

東三条院の御屏風に旅人山櫻を見たる所
をよめる

源道済

散果てはやうらんとおもも忘られぬほ山さくら花

延喜御時屏風絵によりてもおほくさけり

雨に人々あつまりてよめる

見る宿に咲見るにちりけり桜花卯月まではあらましをと
とどむ

大納言公任花のさかりにこんといひてひさしく
まとつまで侍らざりければ

中務卿具平親王

花盛みれ散りなむ世をぞ思ふ宿にかへるをつけくら
人とまつ

後拾遺和歌集第二

春下

三月三日もゝの花を御覧じて
花山院御製

みちよへてなりけるものをなとてかはもゝとしもはたなつけそめけん

天暦御時の屏風にもゝの花ある所をよめる
清原元輔

わかやとにうゑてかさせる桃の花もかゝる春さへたえし

世尊寺のもゝの花をよめる
出羽辨

ふるさとの花のものいふ世なりせはいかにむかしのことをとはまし

永承五年六月祐子内親王家歌合に
なつのこの花題を人ゝよみ侍けり
よめる
堀河右大臣

さくら花あかぬあまりに思ふかなちらすは人やをしまさらまし

題しらす
内大臣

ねしやともちりもしまらぬ花ゆゑに春は山へとしもへにけり

天徳四年歌合に
平兼盛

ことゝせに散るをもあかぬ世ゝ桜花あかねんはいつくとゝまよ

大中臣能宣朝臣

桜花まつ起ふちりそなからりまさき人の折もしら知

屏風絵にさける花乃ちる代折みるかなりやゝにはかな讀待まる

源道済

山里にちりなそぬ宮よ花ゆ年雑かくてぞ今

春神女のやまとく待ちとまちにて花

あふりて待けりにちきのみりかて

見や人もかく雨ちりいと折もろくちり

け綿んてらつまりてあらん待乃

右大辨通俊

春棲ひしるれかゝあゝ桜花おほれぬるやらん

山路落花よめる

橘成元

ちる花をみてねきちりゆかりいかはなにしるれ山

瀧乃ちる花よめる

坂上定成

桜ちる花のみちにきる風は花の宿をらむらん

花の庭にちりてのちそこゝろよめる

清原元輔

花はけふまて枝にも今夜は錦と存候こゝろ

兼暦二年内裏後番歌合にさくらを
よめる作なり

藤原通宗朝臣

胡しも山はちりもこまちて桜花わかれん心そ見え侍りなり

たいしらす

永源法師

心から物をこそおもへ山桜尋ねゆきせはちる花見すや

三月はかりに花のちるを見てよみ侍るなり

土佐門院通敏

うら山しいかなる花かちりにきぬん梅もちりて月しもかなしきつてて

永兼五年六月五日秋子内親王家歌合

侍はらぬ先勤

大貳三位

吹風を知りえへつらよ桜花心とちれる春しかなれ

多かりし次

中納言宗定朝臣

道遠く花に心をやりてかへる桜しかるに海のきはかなれと

家路にかちり見えてきこもかゝりし戒よなり

大江嘉言

こゝにあぬ人もみよとて桜花水の心にまかせてそ見る

白河にて花のちりて訪ふ人なる侍なり

土御門右大臣

りまちを吉野の滝なれや白川の水をさへとめて 中納言

粟田右大臣乃家に人々のまかりて花を惜み
し侍りけるによめる

藤原為時

をしまでて咲きし花は咲きちりぬともかなし
春は行くらむおしまれて行きまれなるらむ

和泉式部

風たにも吹はらはすは庭桜ちるとも春のうちは見えまし ありイ まし

三月はかりに野の草を見侍りて

藤原義孝

野へみれはやよひの月のはつかまてまたうらわかきさゐ ハイ たつまかな

つゝしをよめる

和泉式部

岩つゝしおりもてそ見るせこかきし紅そめの衣ににたれは

藤原義孝

よしをこゝろおもひしかともなくさみけるかな ハ

月輪といふ所にまかりて元輔恵慶法師
なとゝもに庭の藤の花をもてあそひてよみ侍る

大中臣能宣朝臣

藤の花さかりになれは庭の面におもひもかけぬ浪そたちける

題しらす　新大女御

むかしおもふ庭にかはらて春の花いろもかはらす梅さくさくらん

春の花折りてかさゝせしこともむかし我身とおもひの色やそふらん　源為善朝臣

兼暦二年内裏歌合に春花いへる　大納言實季

水そこにもむかしなからのかけみえて月の光そおもひわかるゝ

民部卿泰憲近江守に侍りける時三井寺にて歌合し侍りけるに春の花をよみ侍りける　詠人しらす

すみの江の松のみとりもむかしきしのうへにてかはらさりける春のいろ

題しらす　藤原伊家

道とをみいそとも折りしこれ里もいつまてやさかね山さくらの花　大弐高遠

石水にはなくかりも下ところきて北山のさくらかな

長久二年弘徽殿女御家歌合にかへる川上
よめる　良暹法師

見かはれくもて桜のところ松にさへ花をわかする井手の山さくら

題しらす　藤原長能

松へては八十へつれ野への百千鳥ふりしく花を見るも我かな

法輪に道命法師の侍けるにつかはしまかり
てろよりよりはこゝろありける歌まかりてよめる

法円法師

我宿とりまく稲かりよりはなるゝ鹿まそ歌も聞ける

三月はこころの時鳥のなくを聞てよみ
侍る

中納言定頼

時鳥思ひもかけぬ春なけはことしそまたて初音きゝつる

三月つこもりの日惜春心を人々よみ侍る
によめる

大中臣能宣朝臣

子級かなすなるはいふも暮春は又もくるとん

三月つこもりの日おやのいみにありてよ
める

永観法師

惜むひつる事のはしなき野にてきて又春に逢人
別かくらむ

後拾遺和歌集第三

夏

四月ついたちの日よめる

和泉式部

櫻色にそめし衣をぬきかへて山郭公けふよりそまつ

四月一日ほとゝきすを待心をよめる

藤原明衡朝臣

きのふまて惜しみし花は忘られてけふはまたるゝ時鳥かな

津のくにのこやといふ所にてよめる

能因法師

霞やと花の梢乃夏にかゝる時ハいつくの山も見えわかりける

此家隆の朝臣と申ける時百首奇に
よまれ侍りける中に

源重之

夏草ハむすふはかりに成にけり野かひし駒もあくかれぬらん

たいしらす

曽禰好忠

さ乃起とる月毎に[illegible]神山のかけをしのひつゝ[illegible]

山内の水鷄をよみ侍りける

大中臣輔弘

八重志けるむくらの門のいつまきにさしゝやかふと[illegible]水鷄そ

山家の卯花をよみ侍りける

藤原通宗朝臣

行やられて見る人も歩き山内とは我のみ見えてさける卯花

民部卿泰憲近江守に侍りける時三井寺にて歌合し侍りけるによめる

よみ人しらす

白波の音せてたつとみえつるは卯花さける垣ねなりけり

題しらす

月影をいろにて咲る卯花ハあけハありあけの心ちこそせめ

ある所にて歌合し侍りけるに卯花をよめる

題しらす

大中臣能宣朝臣

卯花のさけるあたりは時ならぬ雪ふる里の垣ねとそ見る

正子内親王の絵合し侍りけるにかね
のさうしにかきつけゝる

相模

見わたせは波のしからみかけてけり卯の花咲る玉河の里

伊勢大輔

卯の花のさけるかきねは白浪の立田の川のゐせきかと（とそみる）

卯花を見てよめる

源道済

雪とのみあやまたれつゝ卯花のこゝろとはれりとこ（中山也）

法師の大山寺にこもりて斎会侍る

によめる

元慧法師

我宿のかきねな過そ時鳥いつれの里もおなし卯花

たいしらす

慶範法師

子規まつとてもねぬ心みるあさ〳〵とのみたゝにあかれ（ハイ れい）

四月ついたちの日太秦の馬場に時鳥き

かんとてまかりけるに夜ふかくまてまち

侍らはかりなれは

堀河右大臣

子規こゑもかりねのまてきゝつゝやさえや宿をくらん

道命法師山寺に行てよみまつりける

こゝにわかきかまほしきはあし引の山郭公いかになくらん

藤原高忠

返し

足曳の山郭公このころはたかさとのこゑをきこ

道命法師

禖子内親王かくれ侍りてのちまかりける時女房

して侍けるに後三条院在坊時祐院よ

侍ける人のもとにむかしをおもひいてゝまいり

のあやめの日かんさしまつりける

きゝえやかれ気非山の子規ありしむかしのおなしこゑとは

皇后宮美作

参れつらひしてかんさしまつりたまひてお(?)く

とふらひもとやかひ侍りける大宮の長房

只(?)侍ける(?)をれてつかはしける

備前典侍

子規なけりしてそまちかれしこゑをつけや挹(?)

有明の月やあはれやまてほりかゝりしかたかく

よなんきつゝやゝ人のいひをききて侍りけれは

大中臣能宣朝臣

まてしはしあかつきに鶴のこゑす我心にかゝるこゝろそ

いかにしてこよひの月をみむ中ゝに時

をしむまてこよひそなき

増基法師

これもみな猿てふ乃こゑをまつ都のすみかこそ又これ物かたり せよ

寺にいりて侍けるに　橘資成

よひのまは海とみえつる都かなあはれてきこゆとき　寺せん

永承五年六月五日祐子内親王家歌合によめる

伊勢大輔

都にも君をまつ夜のさやけさは都の心もとかはさこそあれ一つ

能因法師

秋の夜はわけてもみえてきかん都の志のゝれ杜のかくなり

藤原兼房朝臣

夏の秋はさえてもやかくと時なるをさそ思ひけるの人はさや

小弁

誰ねられぬにつもりぬれはおもふとて一つに　なり

祐子内親王家歌合なかにくものら人々あまたよみ侍ける

宇治前太政大臣

いりぬる乃月にすみかはや都にてこの雲のゆくらむ

宇治前太政大臣卅講の後歌合し侍りけるに
郭公をよめる　赤染衛門

おりねせしなく夜もすからに時鳥待とそやなく（ねらぬ）
らむとすから待つゝ物絶まゝにあかそこねあかし

相模守にてのほり侍りけるにおひそのもりの
もとにてほとゝきすをきゝてよめる

大江公資朝臣

東路のおもひてにせん郭公おひそのもりの夜半の一こゑ

郭公をきゝてよめる

法橋忠命

きゝつるやはつねなるらん時鳥老は寝さめそうれしかりける

長保五年五月十五日入道前太政大臣家哥
合に遥聞時鳥といふ心をよめる

大江嘉言

いかなれは彼の多くわか待時鳥こゝに一こゑ心まとひ（とい）に
五月のかりにわかりそ見えにつらゆけり

道命法師

時鳥まつにかゝこゝそ思ひつゝ雲井そのなし稀にまれなり
子規をきゝて教きくのことを拘子大のかりに

柊命やけの御事に海りて山寺に侍るに

閑居聞郭公といへる事をよめる

律師長済

一こゑをきゝてかへりし鶯にことになくかとおもひけり

ほとゝきすをよめる

静円法師

郭公きかぬねらひのさかりはかゝる秋とてもあるまし物と

大貳三位

まちし夜も待夜もきゝつ子規花橘の匂ふあたりは

小辨

ねてのまや人はまつらん子規こゑやとゝきゝぬ夜そなき

さ苗をよめる

そねのよしたゝ

みたやもりけふはさ月に成にけりいそけや早苗おひもこそすれ

永承六年五月殿上根合によめる

藤原隆資

さみたれは日をへて苗おかりそめに山田のさなへとらてくちぬへき

宇治前太政大臣家に卅講の後歌合し侍けるに五月雨をよめる

さかみ

五月雨はみつのみまきのまこも草かりほすひまもあらしとそ思ふ

家経長か桂山庄にてうたあはせしけるに

侍りける　　藤原範永朝臣

さみたれハみえしをさゝの原もなしあさかのぬまの心ちのみして

橘俊綱朝臣

つれ〳〵と音たえせぬハ五月雨の軒のあやめのしつくなりけり

たいしらす　　数覚法師

五月雨ハをやむけしきの見えぬかなにはたつみのみかさまさりて

五月五日ある所にまかりてよめる

侍ける　　恵慶法師

昔こそよそにも人のみかハあやめ草あやしく駒のすさめさりける

永承六年五月五日殿上根合によめる

良暹法師

さくまゝ花こそのみなりけれよそにみしあやめ草

右大臣中将に侍りける時家歌合によみ侍る

大中臣輔弘

寝やの上に根さしとゝめよ菖蒲草尋て引もおなしよとのを

かしこくすみ侍ることありてとほく侍る
ほとりてもとのところに帰り月五日によめる

伊勢大輔

今日ことにあやめもしらぬ身なれとも宿ことにあや宿ともくれハこゝろたえよかし

さみたれの空なつかしくにほふかな花橘に風やふくらん

大貳高遠

昔をは花たちはなのなかりせハなにゝつけてか思ひ出まし

ほたるをよみ侍りける

源重之

おともせて思ひにもゆる蛍こそなく虫よりもあはれなりけれ

宇治前太政大臣卅講のゝち歌合し侍ける

ほたるをよみける

藤原良経朝臣

沢水に空なる星のうつるかとみゆるは夜半のほたるなりけり

たいしらす

能因法師

ひとへなる蝉のはころも夏ハなをうすしといへとあつくそありける

源重之

夏かりの玉江のあしをふみしたきむれゐる鳥のたつ空そなき

そねのよしたゝ

夏衣立田河原の柳かけすゝみにきつゝならすころかな

ひむろをよめる

源順

夏の日になるまてきえぬ冬こほり春立風やよきてふきけん

なかの秋乃月といふ心をよみ侍りける

土御門右大臣

夏の夜乃月ハ程なくいりぬともやとれる水に影ハとゝめなん

大貳資通

おほゐ川ハわたるしらしと思ふまよひもさゝね夏の夜の月

宇治前太政大臣家に三十講乃後歌合し侍りけるによみ侍りける

民部卿長家

夏乃夜もすゝしかりけり月影ハ庭しろたへの霜と見えつゝ

中納言定頼

春夏の息の庭ハかりの国にをれる錦しきそしと見ゆる

道済かいへにて雨夜こゝなりとおもふとよみける

といふ心をよみ歌

能因法師

いかなれは今秋乃毎にかとこ夏の野わけ草葉の露のおきけかりける

題不知

曾禰好忠

まてみよといひし家のまかきにやらん見えひとりやさこ夜の花

平兼盛

夏ふかくなりそしにける大あらきの杜の下草なへて人かる

夏秋あはせしおなしこゝろをよみ侍りける

堀川左大臣

程もなく夜はさびしく成ゆく人命もしられて秋やきかん
われの夜あかり明の月はよなる

内大臣

夏衣のあかぬ明乃月とみる秋とまでこそ風もさびしき
信綱卿とりわけて晩涼出秋といふなる
よしみ行りけり　源経綱朝臣

夜山の川れ人よくく夕暮むかし秋のいろこそ見れ
扇風絵ある夜の晴まで山のうま
ふるさとの歌を

一
ともちらさえむりく初りあ声小倉山秋行のあに
いつもれ急来りかく涼きをうよとも
よみたてりる勅　大中臣能宣朝臣

小秋ふるき岩井の水はきまけいむすびぬ袖に涼りけり
夏ふくるまゝ　源師賢朝臣

一
夕立も物さか心ありしかど
あみもなかるれんちぎつれて　伊勢大輔

後拾遺和歌集第四

秋上

あきたつ日よめる

うちつけにたもとすゝしくおほゆるは衣に秋はきたるなりけり

よみ人しらす

あさちはら玉まく葛のうら風のうらかなしかる秋は来にけり

恵慶法師

大かたの秋くるからに身にちかくならすあふきの風そかはれる

藤原為頼朝臣

七月六日よりよみ侍る
一とせにふたゝひも七夕の今来といふはわかれなりけん
小辨
七月七日庚申にあたりて侍りけるによめる
大江佐経
いとゝしく露けかりけん七夕のねぬ夜にあへる天のかはかせ
七月七日よめる
小大君
七夕のあさひくいとのみたれつゝとくやとけなん今宵まつらん
七月七日宇治前太政大臣の家にて歌合し侍るに
人ことにけふ〳〵とのみこひらるゝ憶牛女
言志といふ題をよみ侍りける
堀河右大臣
たなはたの雲の衣をかはかせにかへしてやかへるやしきそゆる
七月七日からすのはかなきをかけ侍りける
上総乳母
天川とゝまる舟のかちのおとにあかつきとをかへるらめ
七夕の家にてつとめて七夕をよめる
能因法師
秋の夜を七夕つめとくらへつゝわかれのまたぬ人のいかにかなしかりける
七月七日よみ侍る

梅元任

七夕のあふ夜のそらもはれはれと月よりさきにおもひそめけむ

右大将通房

待えてこそうれしかるらめ七夕のあひ見ぬほとの契なかさは

七月七日七夕の心をよみ侍りける

なかなかに待ほとよりもくるしきはあひのそらを見てもみ侍ける

新左衛門

ふたつ人のあふ夜もやいかなる天の河の心ならん

七日七日風のけふ吹しくてまつそかはりて七夕

月かはりてまつ八日十日あまり待わたる空かな

とまつまつり侍らんとす

小輔

たなはたのかたみにあへる七夕のかはらぬやまの

居易初到香山心といふことをよみ侍る

藤原家経朝臣

いそのかみふるき都を見れはすむ秋の月そも

客依月来といふ心をよみ侍りける

あるじかわかりけるときのことも

よみ侍りける

左近中将公實

忘られ人をとひけり雉の声は月てりとてぞまづ今ぞ鳴く

花山院東宮と申しける時閑院に移らせ給ひし
て秋月のおもしろかりけるによみ侍りける

大弐高遠

秋の夜の月見るにいでてよをふれば更に我をもあはれのいそ わたる

三条太政大臣左右とわかちて前栽植ゑ
侍りし前に虫をはなちて十六人とえらびて
歌よませ侍りけるに水上の秋月といふことを
見侍りける

平兼盛

ちりなくて世のかゞみつくる水に光さしそふ秋の夜の月

土御門右大臣家にて前栽合し侍りけるに秋
月をよめる

源為善朝臣

大空の月の光しあかければまきの板戸も秋はさされず

河原院にてよみ侍りける

恵慶法師

すだきけん昔の人もなき宿にたゞかげするは秋の夜の月

題しらず

永源法師

身とつめばいつもわびしき秋の月山のあなたの人もまちけん

くら人になりての秋南殿の月とも思ひ
てよみ侍りける

源道済

余所にして雲ゐのうへにて見る時も梅の月日はあかれ それからなる

寛和元年八月十日内裏歌合によみ侍りける

藤原長能

いにしへを見る月はいかに梅の秋はいつまで乱れたる かなしさ

八月十五夜月をながめてかきたる代よめる

前大納言公任

すむとてもいくよもすぐし世の中に曇りがちなる秋の夜の月

広沢にて月を見てよめる

藤原範永朝臣

すむ人もなき山里の秋の夜は月の光もさびしかりけり

山に侍りける人くまて来てかへりける

またたよ紀勲 素意法師

とふ人をとまれかしとや山里にすみもやらずにすむ梅の秋の月

題しらず 藤原国行

去年の夜の袖をぬるとてたえいふ月もなれたる秋なり

八月十五夜よめる

惟宗為経

いにしへの月かかりせば葛城の神は夜るとも契らざらまし

堀川右大臣

秋はなかなかさむ月を詠れハ猶ふかくてきこえ侍りけり

藤原隆成

うき雲にはれてもりくる月かけをあはれとみる秋の夜の月

赤染衛門

こよひこそよにある人はゆかしけれいつこもかくや月をみるらん

たいしらす

よみ人しらす

秋をあまたこよひこそ月も月見よところみる哉

式人云頗陽院ゆく八月十五夜月知ろく

侍ものに宇治前太政大臣よみと侍れハ

光源法師よみ侍りとなり

清原元輔

いろ／＼の花のひもとく夕暮に千世松むしのこゑそきこゆる

きくむしのこゑときゝてよふ

大江匡衡朝臣

とやかへりわかてならしゝはし鷹のくるときこゆる鈴虫の声

前大納言公任

ひとりねの秋をあかして寝覚せよ夜半にも鹿のなきたるかな

同し

四条中宮

たのむ人をあはれとみるもわれならぬ絵そのまゝ

長恨哥の絵に玄宗もとの所にかへりてむし

ともみをくゝとか雁たちてかんかはらなけり

経るとやわかこゝろ越よめる

道命法師

かつ見れはあさらにうとあまてそ夜すくる雲風そよそ
ことなく

こゝろしらぬ

平兼盛

あさちふの秋の夕暮なくむしはわかことしたにものやかなしき

大江匡衡朝臣

梅風に形たゝりけりすゝ虫のつゆまへいりなんとすらん

うねのくらして

いけやあさちによる松のきえかへりともに秋風わかきよま

寛和元年八月十日内裏歌合によみ侍る

藤原長能

しら雲にこゝろかけてまつらん玉つさをかきつらねたる初雁の声

ひさしく見えぬところにかりのなきけるを聞てよめる

赤染衛門

あきとみねわかことよりはかりかねのなれきかれたりけふをこそ

後冷泉院御時后の宮の歌合によめる

伊勢大輔

たよりくるひのあとそなくかりはとの羽風や秋をさむからん

八月はかりに殿上のをのこともあまた所よ
まさに嵯峨野にて野中虫といふ心を

御製

行て見道をさへてかりつる虫のねきこゆかりなれはとをやる

八月ころもろ人とよめる

良暹法師

おほかたの空乃秋せ（秋のならひ）をりつれはふかきにかへり見えけれ

源縁法師

君ならしの駒ハあまたあれとも坂の関のまきまね

屏風乃絵にこまむかへしたる所よみ

侍りける

恵慶法師

もち月の駒引時をあふ坂乃木下蔭にとみて渡るなる

禅林寺に人〻まかりて山家秋晩といふ
こゝろをよみ侍りけるに

源頼家朝臣

蓬生ハあさちか原の虫の音をきく人の庵をしるへなりけり

公基朝臣丹後守にて侍りける時くにゝて歌合
し侍りけるによめる

源

庭乃萩小梅としらみ分る秋花妻乃松ハ尽なりけれとも

萩風待鹿といふことを

御製

手ひとつ萩の花ちるをまれ行て見れハ今朝しもまねく萩の

山里よりかへりまてよめる

大中臣能宣朝臣

梅の花なくかりしもあれ庭乃あくるまて花にそおく露

土御門右大臣家歌合に人にかはりて侍る

源為長朝臣

萩か花としらみしかのかり庭の萩の葉ことに露そおきける

題しらす

安法法師

難波なる萩の下枝の色ことに松とも見えて庭そ晴なる

能因法師

我ハ萩花見かてぬともあれ秋の庭のあの庭を書そこそ也

秋宿野亭といふことをよめる

教覚法師

今朝こそ志かの聲もきこゆなれやそ垣根ハ秋の野となれハ

題不知

藤原長能

宮城野に妻とふ鹿そさけふなりもとあらの萩に露やさむけき

禎子内親王家歌合によみ侍る

秋きりの晴せぬみねにたつ鹿ハ聲はかりこそ人にしらるれ

大貳三位

鹿乃音そねさめの床にかよふなる小野の草ふし露やおくらん

藤原家經朝臣

小倉山たちともみえぬ夕きりに妻まとハせる志かそなくなる

江侍従

晴れのゝ梢そかすかなる秋きりハ山のふもとやたちかくすらん

天台座主源心

秋きりのまかきの梢と思ふ下宿の秋ハくれぬらんかし

梢はかりみえつゝありなしとこそきこえけれ

伊勢大輔

梢あしく思ひむすふ萩の上の露ときえなん秋の夕風

見しかともかくたのむへくもあらぬかな

能因法師

思ふことなけれハぬれぬ我袖にうつりてみゆる萩の上の露

誰しのふ萩のなかの露のみよふやうつくしくなとハ

新左衛門

よそにのミみてやハやまん萩かえにおきてみるらん露のをきそ

梢あしきみちをよめる行かへ

中納言女王

人しれぬ物とや思ふ秋くれは心ならねと露そこ(ほるゝ)
月つきよりまさる荻の枝にやおけるらむ
ありつゝしかりける

伊勢大輔

かすかなる中にもかくなりぬとも露のおきける萩のうへとも(よそ人)
こゝろかゝる人のあたりすきて侍りけるに萩
をおりてたまへて侍りけれはあかしはかりに
侍りくとも移ろひにけりはひつるかな

筑前乳母

白露も心おけとや思ふらんわけても帰る宿の秋萩
家のはきを人のこひ侍れはよめる

橘則長

おく露にたわむ枝にもあるものをいかてか君か花のまへ秋(荻)
出つら次

源時綱

衣手に移しいろ宿なれはなさらなれてうつろはなき秋の夕くれ

藤原通宗朝臣

秋風にしつえやまるらんぬれ(荻)小萩か原に龍田かくなり
草むらのつゆとよめる侍りける

藤原範永朝臣

あさきはつ野の露に我ぬれぬらつや妻ある萩か花すり
世の中をもそのいつれ野とやならむとおな
しくよ読

素意法師

いはれ野の萩のわさ露分けゆけは恋せし袖乃にほひそする

題しらす　藤原長能

さか野萩さきくわさ花の末ことにみたれてなひく白露の玉

寛和元年八月七日内裏哥合によみ侍りける

橘為義朝臣

いかなくもねん夕されは萩の葉かに世すき帰

題しらす　良暹法師

袖にまた露こほれけり秋の野はまくりて出てそ切へかりける

土御門右大臣家哥合によみ侍る

源親範

秋の野は花のよそほひも見えてき乱るる露の枝
折りしたに折りてそけふの萩のしつくに
ぬれつつ手折まてとなりひてよめる

大中臣能宣朝臣

草枕かりねにそ秋の夜の露おきあかす我身こそ
人の家の水のかけにさえしの何そ紙よここ

侍る

堀河右大臣

よそにのみかけはなれたる山の井の水をくみてそわかるへきかは
うへ乃ともしとも菊かりにの人よゆりそ
えりきつにはらいきつ

梅則長

女郎花おほかる野へにねなくともしはまろうしろめたくも思ひやるかな

題しらす

少律師慶暹

秋風にをれしとすまふ女郎花いくたひ野へにおきふしぬらん

天暦御時北の屏風にたかかりしたる野に遊ひ人のやとれるところによめる

清原元輔

あきの野にかりそ暮ぬる女郎花こよひはかりは宿もかさなん

毎家有秋といふことを

御製

宿ことにかはらぬのにやうつろひぬる花をとりをきかるとをしるし

寄花雑歌

源道済

よそに見てはゆかしき女郎花むなしき宿を霧まよふとも

あさかほをよめる

和泉式部

ありとてもたのむへきかは世中をしらするものはあさかほの花

題しらす

源道済

いかにしてかく思ふらん夕暮に秋とおなじき風を吹らん

村上御時八月ばかりに人ひさしうまゐらで侍けれは

たれぞこのひそかにわが色ぞひきとしらするかな

まつことひさしく侍りけり

斎宮女御

ふきそふるかぜにあやしく秋の夕暮に萩吹風の音を聞く

大御門右大臣家の歌合に侍りけるに秋風

よみ人しらず

おぼつかな何に吹らむ秋風は夕ぐれ時に吹くとしもなし

賢良朝臣とて侍ける

いつしかと思ひし人は暮ぬともせて萩のうはばに風を吹らむ

三条小右近

たのめども人は来ずしてよひよひに秋風のみぞ吹きしきりける

あぢきなく物のみぞ思ふ秋ぞかなしき

信部卿寛忠

萩の葉に人だのめなる風の音をわが身にしめて明しつるかな

花山院歌合に

秋風をききにとてのみきつるかなつらき人にぞまだ吹きにける

藤原長能

よみける

あき風と露はむすふむしのこゑ之衰秋こそうつくかる

山ちかき所にまかりてよめる

大納言経信母

明ぬるか川せのきりのたえ〳〵にをちかた人の袖のみゆらん

土御門右大臣家歌合によめる

藤原経衡

ゆくあきの風にしたかふ花薄なひくかたハみえけり

野花はてもあそふとみえんとよみ侍る

源師賢朝臣

ゆくそらも心のとまる妹の野辺にもとまねく花薄かな

天暦の時御屏風に八月十五夜前栽ある人いへによめる

清原元輔

こゝろしてかりそめつゆのあき萩の花にはおれの秋なんさくらん

かつらまの月かけて水辺萩花をよめる

大中臣能宣朝臣

水のうへに萩の色ひとしくまさるかな秋のたかけにそある

庭萩秋花といふことをよみ侍る

関白前太政大臣

我宿に秋の野辺をうつせりと花見に来ける人もおほけや

思野花といふことをよめる

良暹法師

なさ中に思ひしらん露やからぬ花のうへ下露　八

梅義清ゥ家ニ而合し侍りしに秋の

花とゆふ家といふこゝろをよみ侍る

源頼家朝臣

露霜に千草の花はうつろひてまさる鹿の音のやどや野辺のゆふ暮

源則實

見るやとよ小萩が原のこゝろ見すりつゝて鹿の音きかぬ世を

題しらず

良暹法師

たづね来に萩が原をわけくる舟人の人もそなし松が枝の秋の夕暮

山里にわびしき海に月かゝりて侍りける　橘

松の上に出る月の秋も行く

和泉式部

おのれしらぬ人をも見て見えんやとおもふ

物思ひける秋の山寺

後拾遺和歌集第五

秋下

永承四年内裏歌合に擣衣をよみ侍ける

中納言資綱

から衣なかき夜すからうつ声に我さへねても明しつるかな

伊勢大輔

小夜更てころもしてうつ声きけはいそかぬ人もねられさりけり

藤原兼房朝臣

ひとりねは夜や更ぬらんから衣うつ声たかくなりまさるなり

花山院歌合に擣衣をよみ侍ける

藤原長能

すゑのはらくもゐてふ秋のよハ月見る人のいもねられさる

選子内親王いつきときこえける時九月十日

あまりふかくつもりちりなりまて人つとかなしむ

ひきりしかへりきてもかへる秋ハあかしかなひ

てらしみるへくなりきる

新院中務

月をこそしらけし荻風の音そ身にしむいつよりも秋ハかなしき

山家秋風といふこゝろをよめる

大文越前

山里のしつの松かきひまをあらミいたくな吹そこからしの風

遣つり次　源道済

見しことをたのみしまたりし山里ハ秋くてそよひきりきなれ

永承四年内裏歌合に

堀河右大臣

いかなれは松ほし志かれものとかちすかくてそ風枝のからくこゑ

宇治にまかりて人々みちのとまりにてまちかくとまりけれはよめる

よみ侍けるによめる

藤原経衡

日暮てつらくものをみちのくのあら秋のかせにしらて

もみぢ見にまかりける二條院人のもとより
このころは何事かとさふらひ侍れはよ
める

上東門院中将

二條院は木々の梢に紅葉してしかこそなけ秋の山里
屏風の絵に旅人海辺をとほくきてみたる所に
よめる

藤原兼房朝臣

わかたひはまたこそきれとをみちなる人の心のとまりなる
りみちなれはあさしとおもふ心は今上にまかせ
給はつきて年毎にまかり侍ける

右大辨通俊

いかなれはおなし時雨乃山のはもしくれ秋はなほまさらん
世の中に身をすてたる人のもとにまかりて
海の紅乃まさるよそよめる

恵慶法師

久しくまからて菊の花をとふらひ侍りて
中納言定頼がまうてきて花ともにまかりて
の花よりまさりけり

大貳三位

はるかなるそれや君かこそたれもかれなん
上東門院きくのはなをかたちのこり

つかまつるとてよめる　　伊勢大輔

めもかれすみつゝくらさん白菊の花よりのちの花しなけれは

藤原義忠朝臣　かくれハ

むらさきにやしほそめたる菊の花うつろふ色とたれかいひけん

後冷泉院御時后乃宮にて人々旅庭菊題してよみ侍る　　大蔵卿長房

あさまたき八重さく菊の九重にみゆるは霜のおけはなりけり

きくの花おもしろきところありときゝて見まほしかりけるに人のまうてきてかたり侍けれは

赤染衛門

きくにたに心はうつる花の色を見にゆく人はかへりしもせし

天暦御時御屏風にきくのそのにたてる所をよめる　　清原元輔

うすくこく色そ見えける菊の花露や心をわきてをくらん

屏風の絵に菊の花咲たる家にきたる人あるところをよめる　　大中臣能宣朝臣

かりにこん人にをらるな菊の花うつろひはてん末まても見ん

いかうとし侍る人のかたにおとこともみまかり

にまかりたる九月ばかりにきくの花うつろひて侍け
るを見てよめる　良暹法師

白菊のうつろひ行ぞあはれなるかくしつゝこそ人もかれしか

相模公資にわすられて侍りけるのちかの男のもとよりま
ゐりたるうつろひたるきくに結びつけられたるをみてよめる

藤原經衡

植をきし人のこゝろは志ら菊の花よりさきにうつろひにけり

五条なりける家にわたりて見侍りけるにおもしろき
菊ともありけるをうつろひ侍りければよめる

中納言定頼

我のみやかくと思へはあさちふの籬の菊もうつろひにけり

永承四年内裏歌合に残菊をよめる

中納言資綱

むらさきにうつろひにしを置霜のなほしら菊と見するなりけり

寛和二年正月入道前太政大臣大饗し侍り
ける屏風に山里にもみぢ見る人きたる所を
よみ侍る

前大納言公任

山里のもみぢ見にとや思ふらむちりはててこそとふへかりけれ

屏風絵に山家に男女このしたにもみちりてあそぶところよめる

平兼盛

まつ河の色見えしまふ紅葉ちる木の下にしもかけゝりけり

山里にまかりてよみ侍りける

清原元輔

紅葉ちるころなりけりな山さとのことそともなく袖のかはくは

月前落葉といふ事を

御製

紅葉ちる色をとゝなる木のもとりあやなく月の影そもりくる

落葉地をかくすといふ心をよめる

法下清成

もみちちる秋の山へは白かしのしたはかりこそみちはみえけれ

こ式部卿宮の人ゝおほ井河にあそひ侍りけるに

もみちをよみ侍りける

堀河右大臣

水上にもみちなかれて大井河むらこにみゆる瀧の白糸

大井川にてよみ侍りける

中納言定頼

水もなくみえこそわたれ大井川きしのもみちは雨とふれとも

永承四年内裏歌合によめる

能因法師

嵐吹みむろ乃山乃紅葉ゝハ立田の川のにしきなりけり

題しらす　藤原範永朝臣

見しりもわすれしにかゝいなれは秋はきこえぬあまの海　さして

後冷泉院御時后の宮乃哥合によめる

伊勢大輔

梅の葉ハ山田のいほにはるつ月ひとりのみこそとりわかれ　しかれ

師賢朝臣梅津乃山庄にて田家秋風

といふ心をよめる　源頼家朝臣

宿ちかき山田乃ひたにてもかけてかく秋風にまかせそ　そよる

土御門右大臣家哥合に秋の田をよめる

秋乃田にかりほよるいほハ山かけの水ひきかけしさかむ織なり　さゝなみ

題しらす　源頼綱朝臣

夕日さす裾野のすゝきかたよりにまねくや秋を送るなるらん　の蓑ワイ

九月盡日惜秋心をよめる

藤原範永朝臣

わかやとはいつとこゝろやとまるらん暮る秋をとゝむ哉

九月盡日終夜惜秋心をよめる

明ぬとも野へにまつらん花薄招くはかりに秋はとゝめぬ

九月盡日よみ侍ける

法眼源賢

秋はたゝけふはかりそとなかむれは夕暮にさへなりにけるかな

九月盡の日伊勢大輔かもとにつかはしける

大貳資通

をしつゝも人をといとゝ惜しまれけるかなくれゆくかたの秋の夕くれ

九月晦夜よみ侍ける

源為長

終夜なかめてたにもなくさめん明てみるへき秋のそらかは

後拾遺和謌集第六

冬

十月のつごもりがたに人々あまた大井川にまかりて紅葉見侍りけるによめる

前大納言公任

おちつもる紅葉をみれば大井川ゐせきに秋もとまるなりけり

十月のついたちころもみぢのちるをよめる

大僧正深覺

たむけにもすべきもみぢの錦こそ神な月にはかひなかりけれ

永承三年十月今上みかりのついでに大井河に[illegible]

御製

大井河ふるきながれをたづねきてあらしの山のもみぢをぞみる

かつらの山庄にてしぐれのいたくふりけり

家經がもとにてよめる

藤原兼房朝臣

冬もうつりの萱かるる時雨にとまる人もこそあれ

山里にしぐれしける夜よみ侍りける

永觀法師

神な月よはのしぐれにことよせて時雨ふるらん山の室

落葉如雨といふことをよめる

源頼實

木葉ちる宿はきゝわく事ぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

藤原家經朝臣

もみぢちる音は時雨のこゝちしてこずゑの空はくもらざりけり

十月ばかりやまでらにまかりてよめる

能因法師

神無月ねざめにきけば山里の嵐の聲は木の葉なりけり

宇治にてあじろをよみ侍る

橘義通朝臣

あじろ木に紅葉こきまぜよるひをは錦をあらふ心地こそすれ

宇治にまかりて網代のこゝろをよむとて
よめる

中宮内侍

うち川のはやくあじろはなかりけりなにゝよりてか日をくらさまし

としつね朝臣のさぬきにくだりてあやの川の千鳥
といふことを侍るによめる

藤原孝善

ありあけのあやの川原になく千鳥声やなみかと聞まがふらん

永承四年内裏の哥合に千鳥をよみ侍

冬歌　堀河右大臣

さほ川のきりのあなたになく千鳥声はへだてぬものにぞ
ありける

法ゝみ

かもゐるさはさる川かみに立千鳥浦つたひとる声ぞきこゆ
なり

読人しらず　いよしき梅

たちはさ小煙とて小も見よとて菓杉なるの山
墨

冬の夜の月をよめる

大弐三位

山のはゝ名のみなりけり見る人の心にぞいる冬のよの月

題しらず　増基法師

冬の夜にいく度ばかりねざめして物思ふ宿のひましらむらん

障子に雪ふれあしたかゝりしところをよ

み侍ける

民部卿長家

とやまなる志ぬ木の霜にこゑとの雪けのあらはゐ色に

たかゝりをよめる　能因法師

打ならし霜をもやまずかりのつきてはのわたりもこえぬ
かりくら

律師長済

萩原も霜がれにけりみかり野はあさるきゞすのかくれ
なきまで

屏風の絵に十一月に女のりたる人のさとへ

こゝろに霜をよめる

大中臣能宣朝臣

霜の穂の草の花作ハあさみれとすこくの人とそさりのへハ

霜かれの草をよめる

少輔

霜かれハひとつ色にそ成にける千種にみえし野へのあらすや

雪落葉をうつむといふ心をよめる

よみ人しらす

松ちるもる庭の木の葉と秋の日とふかりしひてこそわかりけれ
不見 落葉紅

あられをよめる

大江公資朝臣

杦の板をまはらにふける閨の上におとろくはかりあられふるらし

山家のあられをよめる

橘俊綱朝臣

とふ人も初若しき浅茅の宿眉ハふるあられのみ人まちかほなり

永承四年内裏の歌合に初雪をよめる

さかみ

都にもはつ雪ふれハ小野山のまきの炭竈焼まさるらん

うつみ火をよめる

素意法師

埋火のあたりハ春の心ちしてちりくる雪を花とこそみれ

法成式部卿のみこの家にて松の上の雪を
よめと人々によみ侍りけるによめる

藤原国行

あは雪も松のうへにしふりぬれは久しく消ぬ物にそありける

隆経朝臣甲斐守にて侍りけるを聞たよりに
つかはし侍りける

紀式部

よそにてもかひの白根はしらねとも雪ふるたひに思ひこそやれ

山の雪をよみ侍りける

能因法師

とみちせし人の中にも杉むらの梢ゝ山のしら雪ふりけり

源道済

あさほらけ雪ふりてみれはあけやらぬ山のはことに月そのこれる

慶尋法師

こし道もみえす深雪のふりつもり今やと里の人やまつらん

藤原国房

いつかたにわかりし雪のあれはしるへもとめて山道まよはん

積る雪といふ心をよめる

津守国基

跡とりわくる草木の枝はさなからもうつむ雪にうつもれにけり

屏風の絵に雪ふりたる所に女のながめ
たる所をよめる

赤染衛門

春やくる人やとふとまたれけりけさ山里の雪をながめて

道雅三位乃八条の家のさうしに山里に雪ふりたるかきて
にはしきまでゆきたる門にある所をよめる

藤原経衡

雪ふかき道ふみつけて山里は我よりさきに人ぞきにけり

源頼家朝臣

山里は雪ふかくこそなりにけれとはでも年のくれぬべきかな

法師になりて後むかしの住家に雪のあした
人のもとにいひつかはしける

信寂法師

思ひやれ雪も山ぢもふかくしてあとたえにける人のすみかを

[illegible]

ありはへてまことのちやくもりなりと大原山の雪のむらぎえ

天暦の御時御屏風の絵に十二月雪
ふれる所をよめる

清原元輔

家宿にふりしく雪の春よりも文とてもねぶれる花とこそ見れ

雪ふりける朝に大納言公任のもとへまかり
てよみ侍る

入道前太政大臣

松かえに雪つもるらんと思ひやる心をけさはまつそしる
雪ふりて行かたしらむ山里に心はかりはけさそとひける

返し

前大納言公任

ふる雪はかつ消なからつもりけりうきにたえたるぬまさ
かれん

落葉をよみ侍る

頼慶法師

さひしさはふるさとになれしかとかれねの萩のかひもなきかな
たなれ

題しらず

快覚法師

みよしのゝ山したかせにさそはれて雪のふるをもおもひける哉

入道前太政大臣の家にて冬のこゝろをよみ侍る

藤原長能

鵜のゐるはましもにかれしあしのはのかやのしたは水こほりけり

題しらず

曾禰好忠

岩まにはさえてのこほりうちとけて今はかはらぬ水となりけり

氷逐夜結

藤原孝善

むすふれはかつくたけつるいけの池のさゝなみやかゝみなるらん

後三条院東宮と申ける時殿上人々

わかしれ雪あらしはよみ行家の年

藤原明衡朝臣

白妙の子（？）手らのをとゝゐりはゝりに錢見にとし此宮かりて

十二月乃つこもりころ備前國より出羽弁

くりとふ川らしをる

源為善朝臣

冬こもりしとらとぬきつゝ舟参

やそをまうちもゝかへる水

後拾遺和歌集七

賀

天暦御時賀の屏風に立春

源順

と日ころゆにかへくもゝちよを君にあつらん哉

入道摂政の賀し侍りける屏風にかけれる

れうかゐにあそふところよめる

平兼盛

松もをひてまた苔むすいしのみえも

すみか

此時屏風にかゝれのかたちかきて侍る

と

能宣

むかし野にまうてきむれつゝ子日の松をそひかまし

東三条院四十賀し侍りける屏風に子日

して女ともまかりてこ松ひく

所よめる

源兼澄

かすか野のゝ松はいまも君かためいはふそ

前大僧正明尊九十賀し侍りけるに宇治前

太政大臣の家にてうへけるよし人々よみし事に

よみ侍りける

前律師慶暹

君か代はいくよのまれかくもりなき月ものさしてかゝるかな

内裏の御屏風にいろいろの歌人の歌に
書付られけるところに

平兼盛

春秋としらてやしらす家ある松とつるとはしもとをへぬる

屏風の画にかけるかけに松のひとりたてる
所に

源兼澄

一とせに松のしるしはきのふけふちよの心をたのむ世なれは

題しらず　よみ人しらず

君か代にあふみの人はちよかへる松のみとりもちよそたのしき

後一条院うまれさせ給ひて七夜に人々まいり
あひて女房さかつきいたせと仰られて

むらさき式部

めつらしきひかりさしそふさかつきはもちなからこそちよもめくらめ

後朱雀院うまれさせ給ひて七夜によみ侍りける

前大納言公任

いとけなき衣の袖はせはくともこふのいしをはなてつくしてん

題しらず　よみ人しらず

君か代はかきりもあらし長浜のまさこのかすはよみつくすとも

式部卿のみこの七夜に中納言定頼かよめる

右大将一親王うまれ給ひてうふやしなひ

むまれさせ給ひて内裏よりうぶやしなひ
侍りけるに人々うたつかうまつりけるに
よめる

右大臣師房

君をまたちよのはしめのためしにて松のちよをもかそへつるかな
かねて數敏こそまさせ給ひ七夜によめる

清原元輔

ひきこ松大原山のおのれからちよをもせんと千代にまつらむと
匡衡朝臣うまれ侍りけるに七夜にまかりてよめる

赤染衛門

雲の上にのほらんまても見てしかな鶴の毛衣としふとも
よめる

右大臣

松むし七夜にまみ侍りて
千代といのる心のうちのすゝしきはたえぬ家の風にそありける
左大臣一条院の御時の七月七日関白左大臣
まうちきみさくら申しわたりてうたつかうまつれ
給ひけれハ内大臣下らうに給ひてよませ給ひける
ちゝもちて侍りける時あたらしくよめる

右大臣

千年まてかきりある松のふかみとりうゑしそめけむ行すゑの色
かくてうこのへ給ひ家と親王の子の宮にまいりてよませ給ひける

給ける

花山院御製

思事ハなきかぬ揺子れ花さくらあらねと押て[illegible]

故三条院みこの宮と申ける時今上おさなく
おはしましけるに小松かりわたりをかりて見まいらせ
給ひてかくなん候みくとて度々にてすり侍ける
によみ侍ける

伊勢大輔

君見れハちりもくもらて萬代のよはひをのミもます鏡
かな

閑院贈太政大臣

くもりなき鏡の光ますますもてらさん影にかくれさらめや

むまこれおさなきをすゑのみかと見侍
てのちにこれかよのまつなきと舞ひいのり
ちりいをふとせて侍りけるにつかはしける

藤三位

松のひをまてまつこれ乃おひさきの世をとゝかみ乃祀(祈る)ゝ

紀伊守為光おさなき子によそへてこれいはひ
ありくらことよみてといひ侍けれはよめる

清原元輔

萬代をかそへんものハきの國のちひろの濱のまさこなりけり

人のときゝ侍りけるに
住吉の浦のたまもむすひわけて渚の松のけしきを
人のねさなきろくれこともふときせぬ
かわきせんろ海きせわし侍りけるふくろ
けとりて

源しけゆき

いはふあまた千年のかすことに松の京にすやむれ
かゝ

大中臣輔長か妻なく侍りけるに内外戚のお
ほちなく御親王資侍りけるとによめる

藤原保昌朝臣

かさくれなやの松やとらいふありこれのかはきこそ
まつれ

三条院みこの宮と申しける時帯刀の陣の
歌合によめる

大江嘉言

君か代はちよにひとたひゐるちりの白雲かゝる山となるまて

承暦二年内裏歌合によみ侍る

民部卿経信

君か代はつきしとそ思ふ神風やみもすそ河のすまん限りは

宇治前太政大臣の家に卅講の後歌合し
侍りけるによめる

藤原為盛女

松はしまやちよふる人の君か為ひとつ心にいのるいのりと

永暦四年内裏歌合に松をよみける

頓阿法師

春日山岩ねの松は君かためちとせのみかは万代そへん

松契一　歌合によめる

式部大輔資業

君か世はしら玉椿八千代ともなにゝかそへん限りなけれは

冷泉院にしりそかせ給ひて後水かゝみ

見まつる流れしくよませ給ひける

御製

岩くゝる瀧の白糸たえせすてくらゐにかゝれさき

東三条院に東宮まかり給ひけるにかき

つけさせ給ひける年

小大君

君か世にあれこれの水をしかりもり汀の松やそへんとやせよ

関白おほ大まうちきみ三条院にわたり

給ひけるにて絹はた年ことにまゐらするを

人々よみ侍りける

藤原範永朝臣

あらしなきみかさの山のむかしより水の千代なるそ千代をかさねん中つきさ

むかし源兼長丹波守にて侍りける時
その國の臨時まつりの使なりける人藤の花を
かさしてまいりけるを見て

良暹法師

千世ふへき君かかさせる藤の花松にかゝれる心地すら（こそすれ）

後冷泉院御時大嘗會悠紀方屏風に近江國
山松樹多生　式部大輔資業

萬よに千代のかさねて見ゆるかなをかのへのまつのみとり（ときは）

おなし屏風に大倉山によむ

うこきなき大くら山のとこそ見めまつのよはひ（さかえ）

陽明門院たゝしくきさきにておはしましける
人々あつまりて

江侍従

むかし見し雲ゐよりそふる月かけも
しるときくこそうれしかりけれ

後拾遺和歌集第八

別

祭主輔親みのゝくにゝまかりくだらんとしけるに
帰ゝ花山のとみちかはゝかれとも見えんと
すゝかはひさしくいつゝしまる

恵慶法師

とみちさん御まつり秋とまつる祭主君かねせん神と
母きし

返し

祭主輔親

母むかし都のとみちまさる地ゝね秋のうちふかくさるや

みちのくへくたりける人のもとにまかりけるに

侍りけれは花のちりけるにつけける

源道済

つねよりもはかなくそみえけるあさましと思ふはゝ人のつけ(る)

東へまかりて京なる人のもとによみ侍りける

増基法師

友と出てけさかくなりぬるにわかれおもひしにし人に別(ましかは)

遠江守為憲まかりくたりけるにあひ侍りて

行末をつらしともおもはすに絶て

藤原道信朝臣

別てもよにゆきかへる春ことに花のさかりはみすやあらん(見ましかは／せよ)

ちゝのともに越後にまかりけるにまゐらむとて

はへりけり源為善朝臣のもとにつかはしける

藤原惟規

相坂の関打こゆるほともなくけさは都の人そ恋しき

田舎へまかりける人にあふきつかはすとて

藤原長能

きみつねに別のこひかへは心あるかひもなけれは(世)

三月はかりにちゝのこの藤原為正にあひ侍りて

侍りけるに行あひて後とそかくれはなむ

うらみ給ひつまうて侍る

選子内親王

りまとゝとをにたちかへるとよゐのかけゝる花かとれ
花

藤原為正

いかりにちらと浜けらる花かみえてにしきれ松をさそ思ひ
遅られ

人のとはなきことはにまかりたらは

藤原道信朝臣

あれはとも世もうきねよの中にきつりいつまてかあらんと
すらん

入道摂政わつらひ侍りけるころ大納言道綱
母にかはりて侍りけるかへりことにまかりたらん

とへかしとおもひけるそ世の中のはかなきに
いはせて
侍りける

藤原倫寧朝臣

君かよのことしけきよひなから人にはいはて来ぬともおもふか
な

入道摂政

我か世のみえ来むといへる八千よの松のちよともきみそみ
ん
八こゑ

清らにかきて侍りけるのちにしも家

ありしよ人の心にたにかへりしまろ

堪圓法師

山のはに月のまちにはおもひいてゝあきをは風をそ秋も立

源頼清朝臣みちのくはてゝ又肥後守

になりてくたりまかるといふそこらの方に雅

ともなくて行しとも侍りける

相模

為さくれらよせけるに嘉言かんまのむくらいきれ

嘉言つしまになりてくたり侍りけるに人

まかりあふつかはしける

いとゝしく我命さへゆく人のかへらんまてそとけしく成ける

法しまになりてまかりくたりけるに津のく

にのほとより能因法師のもとにつかはし

ける

大江嘉言

命あらはいまかへりこむ津の國のなにはほり江のあしのうら葉を

橘則光朝臣みちのくにへまかり侍りけるにいひつ

かはしける

中納言定頼

かりそめの別とおもへとしら河のせきとゝめぬは涙なりけり

よしみちの朝臣長暦十二月のころおひうさの使

にまかりけるにまかりけはなむけはかりてまかり

ものするとて物のひとく餞たまひたりけ

れはよみ侍りける

橘則長

別路はいつもなけきのたえせぬにいとゝかなしき雲井はるかなれ

涙しへ人ならけるにもとめしとも

人こそけさは人毎にひねりすまはせひらく春
風さそふ花ゆくまゝに思ひやることかいへ
ひとりしてよみ侍ける

慶範法師

雑のりも我をかすにおもひけんたのみし命かな
法しよりのちに良暹法師のもとへ
つかはしける　よみ人しらす

わかれ路の中におもくはおもしく命ひとつそはかなし
きかし

良暹法師

名残ありいのちをまちてことをつたへむやはまたるとも

能因法師いよのくにゝまかりてかへりのほり
きて侍りに　藤原家経朝臣

春は花秋は月にと契りつゝけふを別とおもはさりける

能因法師いよのくにゝくたりけるにまたのとし
下りけるに人々もむまのはなむけしてわかれ
をしみ侍りけるによみ侍る

源兼長

思へ人ともせていかにきみに花のみやこはいて
まかりて人のみちのくに侍りけるに

源道済

ちりひ出よ道をしけるかなりぬとも心のうちは山の人こえて
のとかなりつるかはらぬ人につきてきこえて
よみ侍りけれは
こなたには道にはあれなくにわかれそなたは行人のある
さわまえかまりまた人にはかりける

中納言定頼

まつ山の松のこ風吹きともなとひのよしのやまひさえ
よし

源光成

あかねさすらはまりもあらね夜半にまつる駒ひきあけて
たかよしいつにまかりけるにへく　松浦涼　餞にまひ

東路にまかりけるとて

源兼隆

ちくしへまかりける人はおしみいねさしてさかくらん事いさて
大江公資朝臣遠江守にてくたり侍りけるに
志らなみの末にこ移むまのはなむけし侍りけると
てまかりけるとてよみ侍りける

源為善朝臣

暮くもかけしとほそに別れ行みやこもあらんと
わかるる海のやまを女のりこよひ
つらかりけるとりあとをのこしけるとせよ

こ松のなかにまかりてまからんとすれといひ
て侍ける返しにつかはしける

祭主輔親

わかるれとあはれもおほくたえぬへきよのならひなるやむや

橘道貞（是貞イ）しるへつとわすれてみちのくにの守になりて
くたり侍けるに式部かもとにいひつかはしける

赤染衛門

行人もとまるもいかにおもふらむわかれてのちの又の別を

物いひける女のいつもなくなりてほとなく
とはてなかれける

中原頼成

いつともしらぬ別のならひなれといまそ涙のなきに成ぬる

女もほとなくなりて程なくうせにけるに
月かけをこひてけるよりそ雲井なる身にて
こゝろはかなけれは心地せられといひ侍
まうてこさりけるを

祭主輔親

行事は雲井はるかになりぬとも心はよそにへたてさらなむ

津守にまかりけるもあはれなるに

藤原節信

まかりては頼みし人もなかりけれはいかてさるへき人はや
法しゝ母ゆかりの露はかり侍らす人の別
かなしき侍らぬによめる

連敏法師

つかはし母まさことも懐をもかく出雲へくたる
出雲へくたるとて能因法師のもとにつかはし
りける

大江正言

かはらの院の家に住み侍りけるに寂照法師入唐せんとてまうてきて侍りける七月七日によみ侍りける

天河のちのけふたにはるけきをいつともしらぬ舟出かなしな
けふ

前大納言公任

入唐し侍りける時源心かもとにつかはしける

寂照法師

これ(?)をしのひたれたるこのわかれなりけり

成尋法師もろこしにわたり侍りてのちのちのありとききて
母のもとにはへりける

よみ人しらず

いつかはと思はまてあけくらん
いつ雲井とも知らぬ別に

後拾遺和謌集第九

羇旅

石山よりかへり侍るみちに走井にて清水をよみ侍ける

堀河太政大臣

あふさかの関とはきけと走井の水をはえこそとゝめさりけれ

十月ついたちころみのへまかりて侍りけるに
つまふかきのこちなくよみ侍ける

前大納言公任

もろこしのみむ世乃はてをみて人よそにさりとてもしやはなき

五十　　中納言定頼

まれなるそいさ桜ゝらかんなきさにたにみてかへるさ　松島にて

くまのゝ道にて御心ちれいならすおほされ

けるにあまのしほやきけるを御覧して

花山院御製

たひの空よはの煙とのほりなはあまのもしほ火たくかとやみん

くまのへまいり侍りけるに吹上の浜を

みて

懐円法師

都にて吹上の浜を人とはゝけふみるはかりいかゝかたらん

くまのへまいりけるみちにて月をみてよめる

少輔

山の端（よイ）にさはるかたなく思ひしは峯にてこそ秋の月を　まさて

舟にのりてそかりはにいつるとこそときゝゆとて

藤原国行

さすらへてみやこをこそいてしかはわれまた塩やのかせにつけてこそみよ（せイ）

津の国へまかりくたりて

能因法師

あしのやのこやのわたりに日は暮ぬいつちゆくらん駒にまかせて

東へまかりけるみちにて

増基法師

たれやこのなりたれわく東路を駒の人に月かけそゆく
いろくへをり侍りけるによろこびやことりせいの
ふなまかれんよめん侍る

いろしきよ

こゝろありのまゝにくらやこ鳥部のさと秋にきらせよ
四月つりにわかれけるにまかりて
わかれにわかれくよめん侍りける

惠慶法師

かへん山こゆるにしも秋風のきこゆるや山へ侍る
七月ついたちころにおつりにくもりけるにまよ

すみに雲山といふ所にまかりて
そやかにかくよめん侍る

赤染衛門

おそくとく散るをさかりに見る時の秋風の花のちるさん
こゝろなし

増基法師

はつかりかすまゐりけるに山かれとふ
津の国にまかりて侍るに旅宿遠望の
心をよみ侍りける

良暹法師

[illegible]や大江の岸にかゝりて雲井にみゆる伊駒山かな

為善朝臣三河守にてくだり侍りけるに
すのまたといふわたりにおりゐてはるかに
みさかの山をやりてよみ侍りける

能因法師

白雲のうへより見ゆるあし曳の山のたかねやみさかなるらん

東のかたへまかりけるに海をわたるとて

源重之

東路にゆきかふ[?]…のあれかな
ちかくとも小[?]にきくなれとつくな[?]

[?]けの守まかりくだり侍りけるは海見
[?]のりとみてよみ侍りける

大江匡衡朝臣

東路の浜名の橋をきて見れば昔恋しきわたりなりけり

能因法師

思ふ人ありけるをまかれりとみてはしらるにまかり給へる
浜名の[?]てまかりけるにしらかは関
にてよみ侍りける

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関
出羽のくにまかりてきさかたといふところに

てよめる

世中はくてもなかりきさかこれわするゝ身やと我宿　みして
津ゝしつゝりくらかくらうしてゆ海のうらに
あよみ侍ける

大中臣能宣朝臣

波上のうへ此みかゝりと云ゆ方ゆかゝるやおもはん　行
浪ゝしまかりてゝりかゝるに夢やくれ見えて　つきすし
よめる

大貳高遠

風ふけはとはかれ此桐打かひなき我を思ふねかひきるゝ　物かな
書写のひきりかゆひよんりまかくて　なり

ましてゆくしとゝかきこ此月の此渡りて

花山院御製

月影の猿乃空にてまつるねとかけこのこりし　さやかなる
なり海のゆくしとやまかはまかはらまそよま
そのよく月のかゝりけるよ中空乃こゝろん
ゆみなすり侍ける

中納言資綱

ねかつきぬるやこれやいかならん今来むの月かはらて
よし

紫式部

おもふらんゆくしれゝのこゝろ都も都の月とよみ　しらかん

ひとりのみくもりなき身にて月のゆくへ侍
よみける

康資王母

月はかく雲井なれども見し物をあはれや秋のかはらさりけり

うさの使にくだりけるにまかりける人に

ゐる人の月よまつといひ心はよみ侍る

橘為義朝臣

都にて山の端に見し月影をとし浪の上にこそ見れ

清見かたにまかりて月のおもしろかりけるを

よみける

藤原國行

都にて雲井なるをみきゝしれども松にかゝれる月父名れ

つくしへ海路まかりたる月のおもしろくよみ侍る

西宮前左大臣

おなじ身をわすれにたり船たちあらはかなきを世の中

清見かたに耳にとまり侍る夜に行年しの後守

以にこゝ(?)海に夜見てよみ侍る

右同大臣

揚村にかんみ浦(?)しらけまかりての浦もかひある

いろをみ(?)そへの(?)されよまうみなれよかな

侍りける歌

中納言隆家

ちとせふる松のかけにやとりせしかとも露けき袖に月そやとれる

いくとせかふりし十二月十日あまりの身になり
ていままて月かけの月のまちに

式部大輔資業

いく夜経て君出ましし法の山の月の都のきみに
わかそく
つくしより出けりとみえにさやかなる山とい
海面の月よとそこにみえける

右大弁通俊

わか欧をやまれ堀かみに母わらく早ききさや
くも山とも

越後よりのほり侍りけるに[illegible]
かりふ月ゆくりなきまゝに

橘為仲朝臣

見やこれ月ころひとり思ひ[illegible]姨捨山の時雨かたりけり
ところところかわらぬ月の行侍るにみえける
よめる

源道済

見し人はみな都にて成ぬらんまさかの山にかすみさけり

同
月をみ侍りて

ちよまてくもゐのけふやいらぬらん
見しはきのふの空のかよひ路

後拾遺和歌集第十

哀傷

一条院乃御時皇后宮かくれ給て後御
帳のかたひらのひもにむすひつけられたる
文を見つけたりけれは内にも御らんせさせよ
とおほしかほに哥みつかきつけられたりける

よもすから契りしことをわすれすはこひむ涙の色そゆかしき

しる人もなき別路に今はとて心ほそくもいそきたつかな

煙とも雲ともならぬ身なりとも草葉の露をそれとなかめよ

物のふ女院かくれ給ひてのちまつりたりけるに人
かくなりはてにしをのこきぬにかへてよめる

源兼長

あはれしる流なりきれわかすみのうれしさもき（らさりせん）
山里にこもりゐて侍りけるに人のとふらく
すゝろみえ侍りける程によみける
いつきし梅

ちれりけふりにはかなくきえしは又我よそのかく（ゝん）
三条院の皇太后宮かくれ給ひてさかりの
の秋月見侍りてよみける
命婦乳母

めとしかく雲かくれにし月かけのとゝめしかほの（れなんけ）さかりて（わかれし）

東騎院の法会にまいりてむらさき野
小一条院侍りたひとゝせこの所にて
子日せさせ給ひしことなと思ひいてゝよみ
侍りける
右大将顕光

むらさきの雲にかけても思ひきや春の霞になして見むとは（ゝんゝん）
大納言行成

とりへのゝつねのおもかけいまさらと煙にそひぬるのの（なりさ）
長保二年十二月に皇后宮うせさせ給ひ
ひとゝせの葬送の夜雪のふりて侍りければ
よみ給ひけり
一条院御製

此春そきみにひとつハかくもわかゝ年をはなれしや

入道前太政大臣の法性寺にてまかりさらんて あそん

まかりけるに雪ふりて侍家にまかりよ

み侍る

法橋忠命

たきゝつむ雪ふりしとりへ跡たえて林の深きたより

入道一品宮かくれ給ひてのちをさめたてまつりても

まかりて又の日法ゑんかりにつかはしける

小侍従命婦

それならぬかすみかゝれる山立のほりつゝけさもこひしき

二月十五日のことにやありけんかの御やまさ

うまつりける月をみちかとにはなちける

いまはとのたきゝをつきしかはなかれ君ゆゑかつきにてはた そゝきさ

なし

法ゑん

時しもあれ君か年はやまよるねしの煙ハのほりか ひとかひ

三条院の后宮皇后宮のきさいの宮と申し給ひける時

人々まゐりけるに人のもちて

さりそうの東ふかきとらへつかうまつり

けるをまてて川らんしけるに

山田中務

うかれしむれとてしはさしかへる哀悲しき秋よ ひかり
なかしゝこそみしこのや侍らん人のりとよ
遣はしける　さいゐん
こゝろやとなりひやかゝ小露まよはいにをそ君か袖 ハらゝめや
返し　大和宣旨
瀬河のみなかみとほる孫や袖ぬれけりと人のよ らん
後一条院御時中宮九月にうせ給て後
朱雀院にまゐる弘徽殿中宮八月に
かくれ給にまたかのこゑに伊賀
少将かりとよに遣はしける

弁中宮出雲
侍はかり君かけくらん袂かな袖にしはしつゐわきぬれ ゆく 哀と
左兵衛督経成九月かりにまかりたるにぬれをはきと
いとうそれかるひかとおもんとて節賀居
こそりて侍りけるにつかはしける
小左近
よそにては袖も露けかりけん中にあたりのみこそとこそ なれ
霊山にこもり侍けるに消息ありて かり
かりたに月まかりてのちの十二日にあかり
てものいみ侍ときこえ

能因法師

わかれにしこゝろは人はなきまゝに宿かれにしもおもひいでつゝ

右兵衛督俊實子にをくれて侍りける頃ありどころとひにつかはしける

右大臣北方

いかばかりさびしかるらんこがらしの吹にし宿の秋の夕ぐれ

松やかくなりて山寺に侍りける人のもとにつかはしける

よみ人しらず

山ちかきかねのおとにぞうちながめいくたびよもにあかしつらん

いそのかみ辨がおやにおくれて侍りける頃七月七日よりいとほどなくおぼえて侍るとてよみ侍ける

前大納言隆國

おもひきや別しひとのかずにこそいりてまづしる心地やはせし

返し

出羽辨

なぐさむるひとはなかなか思ひのまし別れになれるなき君がよせ

高階成棟ちかくにとおれりけるがまたなくなりてつかはしける

中宮内侍

たれもなき人のかすがにそへて成(?)もきく程もなく身をもかくれしかなはでわかなた

清原元輔がもとにまかりてさかづきとりけるに
けふあまくきてまかりし元輔がりに
いひつかはすとてよめる
源順
よひのまに元の烟となりにしをはまのやしほのやくとうけぬね
梅則長ちゝしにてかはれ侍りけるによみさかへんり
とにつかはしける　橘季通
思ひ出やおもひいでになるきみがため侍りけれなり
後冷泉院御時后宮の中つぼねよりまかりける
侍りける頃ふみなどかよはしけるをききて上東門院の
ことにひとつ侍りしたまひしとになり侍りける
式部命婦
おとにきくやまとなでしこわかれしなかのこゝろかゞみにとも
後三條院かくれおはしましてのころさつき
ひはなくさとわくらんそて六月一日まゐりしに
雨のふり侍りければ先帝の御事など思ひ
いづることや侍らんよめる
周防内侍
さみだれはあやめぬくまに暁もねざめねばはるかにやにはかなうらん
二条前太政大臣のかくなりてのちおもひ

たのみとこそしてよみ侍ける
中納言定頼母
わすれてはかつともおもひしむかしこそいまはかれにしことはりとしれ
子日をとはれて侍りけるに殊更よみてよみける
侍りける
藤原實方朝臣
うきねせしのとこのうへのしもよりもさむきはねやその命とも知れ
又の朝かへりまうていひつかはしよみ侍ける
藤原相如女
思ふみをなけきし人とおもはなく又我身にとはねさき
洲崎ハ霊田右大臣男にかりて彼家に
ちられたけゆきはこれなしてはるまるに　義なりて
又もあらぬよはまみちかくは稀にまかせいとあらけ
たちまし　ことなんくわかく男まうけり
けるとなよめとなんいひつかはしける
物いひ侍ける女乃もとにちかく男まかりに
くるまに女のおやのいまにはなれける
藤原實方朝臣
契りありてこれよりは又もむかしの花のいろもそ
一条堀殿男まうりてのちわさのことはそへん
人にかりくになり侍まれい

少将藤原義孝

しくれとはちくさの花そちりまかふ なにふるさとの袖ぬらすらむ

小式部内侍なくなりてむまこともの侍りけるを
見てよみ侍りける

いつみしきふ

とゝめおきてたれをあはれとおもふらむ こはまさるらむこはまさりけり

一条院うせ給ひてのちなてしこの花の侍りけるを
後一条院おさなくおはしましてなに心もしらて
とらせ給ひけれはおほしいつることやありけん

上東門院

見るまゝに露そこほるゝおくれにし 心もしらぬなてしこの花

見ちのくの紅葉をもろともに見んと
ちきり侍りけるにかの人身まかりての秋よみ侍
る

藤原實方朝臣

見んといひし人はかなくきえにしを ひとり露けき秋の花かな

五月はかりにかよひ女のもとにわすれ侍りけるあふき
のかへりたるを見て侍りける

大江匡房朝臣

はかなくもわすられにけるあふきかな おちたりけりと人もこそみれ

おやにて侍りける人京に侍りけるをやまひおもく
なりにけれはいさなのありて山さとにて侍りける
にかの人はかなくなりにけりときゝてよみ侍ける

大江嘉言

おもひきやいまはいまはとかくなかにいさよふ人の恋しからんとは

敦道親王におくれてよみ侍ける

和泉式部

今はたゝそよその事と思ひ出てわするはかりのうきこともかな

枕のあたりにあまりにあはれとおもひてよみ侍る

すてはてんと思ふさへこそかなしけれ君になれにし我身と思へは

十二月つこもりの夜よみ侍る

なき人のくる夜ときけと君もなし我すむ宿やたまなきの里

右大将通房かくれ侍りてのち、ふるくすみ侍りけ
る帳のうちなとみ侍りて、れいのやうにてありけれは
よみ侍る

土御門右大臣女

別れけん人は又こそみつせ川はてしなきまて思ひけるかな

まかる人の思ひ出ゝよみ侍る

大貳高遠

よしさらにわするゝ夜かけまてと世中はかなき時はなかしとも
かねつるれ頼信かなくなりてのちまちせんたまはれ
なりそれかりくまりけるにまかりてつかはす
とよみ侍ける

源道済

拾しきにつかはるあまる涙かはかしと知りやいひの衣

小納言かなくなりてわれ礼なる事あけはよ
清少納言よりまゐる百和香ちいさき紙にかきたまはれ
てせうと棟政朝臣にまつりける

選子内親王

のりの為つみける花とかはらくにいまはこの世のことゝみえしを
わたよ人かくりわりまゐる物となりありて侍け
数にしるよしもいはれぬる人にかかりてけれ
世乃りとふつらりける

伊勢大輔

かさしたる花たちは海さうの涙にわれよりしか
かくて侍りける十月一日右歌よみ海かう
人これのきかんわれときかくすれといひまさ
せく侍宰相よめる

康資王母

名のミや花れいろみも詠へてたりし秋露ハおきし

赤染衛門にさされくのちみ月みかとえて 秋かう

詠ミし歌

美作三位

墨染れたりしいろことひらけそれおやかれ草のおやさけ

圓融院法皇う世ゆ麹給て又の歩のれ ろはん

きその日さこ可とれころやありもんうに侍

るれかれとの前三位のつ可ミにくゝとひ

乃ゝみちおひ法し此ての秋内むかしそ

ゆいれさも給ひけ契

一条院御製

ここ代ハみかへみと思ふを都にハたちらこや去らむ

後冷泉院ゝくるまに法りも給ひきれし さて その秋

五月かりいそ侍りて又のとし此秋東三条の

つほねのまえりう人々く侍ちるたち代人の

にほひそりてきこえりされま

弘徽殿女御

いはくとりも色ここそここまれ萩の花源の面にぬらる 秋まハ

成順にとられ侍りく又のとしのしらかの

侍ちるに

伊勢大輔

別れにし日つゝりハやくりきそいまうとくてぬ人ふ遠さ

やしころすゝ作家のかまとられてみのと
しるそれはさきつまりけるによめる

紀時文

とし経てかれ毎の人も別れにしこゝろのうちそありける

返し　清原元輔

わすれんもをしとそ海川ゆりのありしこゝろのなとも

後一条院位時皇太后宮歌合によみ侍りける

たそかれはさきに作るとふりてまいりさり
名れは名月やうきのうちすてかけて花也
なとかひかれとせしく侍りけるによめる

江侍従

我身よにふかるわか車世中は世にかくれあと思ひさりける
ちとせのかてあまの作まつり日によめる

平棟仲

おりひかれ思ふみにそ秋し思ふ涙に衣よれて別れけれは

平教成

うきちよ夜ふけのこれもわかれし涙のかけ神の郁
海くれさ作家のありよめる

藤原定輔朝臣女

うなかみかさみ手に河のかち衣くそいふ涙よるかな

十月ばかりにものへまかりけるみちに一条院
をとほるとてくるまをひきいれてみ侍りけ
れはまかきともやなきれ侍らぬをみてよめる

赤染衛門

きえにけるゑしのたく火乃跡をみてけふりとなりし君そかなしき

菩提樹院に後一条院の御影をかきて侍りける
をみてかの御時まゐりしたまひしをおもひいて
てよみ侍りける

出羽辨

いにしへのうつしとゝめん雲井まであふくにくもる月の光を

匡衡にをくれ侍りてのち山にまかり侍る
みちにありし故家のいたうあれまさりて侍りける
秋のゝもまれは垣ねにとられてよもきせり
なくかはる侍らなくなりといひあれはよめる

赤染衛門

鶉とりてそあはれなりけるふるさとはまつまゐるかなとはむ人もなし

年のくれにまかりて侍りけるに小一条院のうせ給ひて
たゝひとりかなしとふことを後にかきつけて
せうそこをみてよめる

源信宗朝臣

一

侍りける事はかつてねと浪のたつひにおきたり（き）
思くたえて侍るうちつゝにまきてかの信家
許にこれはさまにはへりつかはしける

伊勢大輔

ねたしやな家なるはみなのこりなく花もちりにしあはれ（れはん）
あき身なりけり人と契りひにそよ

源重之

年ことにむかしハ惜くありけるかな秋ハ文も
春の日の契り折はなかたちのへし（まとらり）
このさとにふるしるしかはわつてひ給たなく

明りさしにしましてねよみたえんと
いかにせん女御にいひ（侍て）はもなく身まかりて
乃ち見るれくとかゝてきれはこの秋（なと）
此寝ふ君て侍なりこと明り（けるo）

しをれにし草の花さへちりはてゝあめあめかなる霜小神無月
このころより雨かわれ侍くのちに十月つくり（はへりん）
は頻縁法師の中なりに心ふけして供給
梅くと見ゝはとあくらにてなのにかつり
なゝ母のかくれうちとんちてまいりく
いふみにひ侍りまれんとそおひさとそて

よかりなかりんのひきゝてこしける

きそかれしこゝろを見て袖ならぬまゝ別し秋よあけに　〳〵

涙寄月海くりてのちわかれしの秋いとゞ

とし月ふりかねらしうらうきとてみて

侍ける

ゆゝ事なん聞くれとふいさくそこ恋ちかそへは

ある人のいさくけなき月よ女とさまそてみ月

舟りふかたところも出に見る夢よ見女と

とせよとそてよ見侍ける

むかしの女見りとふやかとそてよみ侍ける

よみ人しらず

あくるも君ハつ恋川あ起人のちさえりてといて

女いかゝう語起ぬかりとふよ見侍ける

ゆきふる海とぞの

しくそ家とそりて

いえ海浮なれ